

廻靜論にみられる反對論者の「空」批判について

塩 田 隆 明

（ここでいう反對論者とは、竜樹の空思想を認めない立場にあるものをさす）

廻靜論（以下「VN」と略す）は七十の偈と、その註釈からなる論書であり、最初の偈から二十偈までが Nyaya 学派と abhidharma 仏教の立場にあるものとの竜樹に対する論難という形で説かれ、二十一偈から七十偈までが、それらの論難に対する竜樹の反批判といった形で構成されている。以下は、この VN にみられる反對論者の「空」批判を中心に、根本中頌 (Mūlamadhyanakārikā) を参照しつつ竜樹空觀の立場を一考したものである。

VN において反對論者が批判するところのものは、具体的には竜樹の説く空 (śūnya) である。そしてそれは直接的には「本質 (svabhāva) の存在を否定する立場」を否定する」という形で論じられる。MMK において、已縁生（縁りて生じるもの、pratyasamutpanna）・本質（自性）・空の關係が「(x) (Px ⊃ qx) ・ (x) Px ⊃ (x) qx, [(x) (qx ⊃ Px) (x) qx] ⊃ (x) Px と導びかれることから、この「本質の存在を否定する立場」を否定する」ことが即ち、空を否定することになるのである。その際、反對論者は三つの立場から空に対する批判を展開していることが知られる。その一つは「一

切が空であることによる諸々の矛盾をつく」立場である。もう一つは「空でないことの正当性を明かす、即ち一切が不空であることを実証する」立場である。そして三番目として「空を説く竜樹の論理方法そのものを否定する」立場である。今ここでは、先に述べた最初の形の論難についてその実例と、それに対する竜樹の反批判をあげて検討してみることにする。

この形の論難としては、VN 第二偈をあげることができる。即ち、「若しも、ものの本質がどこにもどんなものにもないとするれば、君の言葉も本質をもたないことになる。従つて本質を否定することはできない」。この論理が成り立つ背景として反對論者の側に「本質のないものが本質を否定することはできない」という大前提が存在する。そしてこの論式の最初に出てくる命題、即ち「ものの本質はどこにもどんなものにもない」とする主張は竜樹の立場のものであるが、これを仮定的に受け入れて小前提としてそこから第二の命題である「君の言葉にも本質はない」という結論を導いている。さらに「本質のないものが本質を否定することはできない」という大前提から第三の命題である「君は」本質を否定することができない」ということを導いているのである。即ちこの偈は、竜樹の言葉に本質が存在する場合においてのみ竜樹のこの命題が肯定されることを意味し、その場合においてはこの命題自身のもつている内容と矛盾してしまうことを反對論者が指摘し、論難しているものであるといえる。これに対する竜樹の立場は「若しも、私の言葉が因 (heu) と縁 (pratyaya) の組み合わせ（和合、samagrya）の中において存在しないか、或は又、彼ら（因と縁）とは独立して存在しないならば、空性は成立するなせならば、ものには本質がないから」という形で

表される。即ち、この偈において竜樹は自身の言葉に本質が存在しないことを認めているのである。この立場は先の反対論者のものと同じであるが、反対論者が本質のないものが「本質を否定することはできない」との立場から、竜樹に生じる矛盾について「本質を否定することはできない」と論理を展開させたのに対して、竜樹は「私の言葉に本質がないということによってものの空性が証明される」と論理を展開させたのである。この両者の違いはどこから生じてくるのだろうか。VN 第二十一偈において竜樹は⁶⁴ yaśca pratiya bhāvo bhāvānām śūnyatei sā proktā / yaśca pratiyabhāvā bhavati hi tasyāsvabhāvatvaṃ // (x) ㄱㄴㄱ 亦、ものゝ依存 ㄱㄴㄱ ことが空性 ㄱㄴㄱ ことであるを我々は言う。依存してあるものには本質がない⁶⁵)、即ち、この二十二偈と先の二十一偈から次のことが導かれる。① 依存してあるものには本質がない、② 本質のないものは空である、③ 依存してあるものは空である。この①～③までを形式化してみると次の如くなる。(x) (Px ⊃ qx), (x) (qx ⊃ rx), (x) (Px ⊃ rx)。この形が論式として正しいものとなるには①と②の間に「(x) Px」という大前提が入らなければならない。けれどもこのことを明示した偈は VN にはみられない。(MMK においてはみることができ⁶⁶)、今ここでの大前提のもとに①～③を組み立ててみると (x) (Px ⊃ qx), (x) Px ∴ (x) qx, (x) (qx ⊃ rx), (x) gx ∴ (x) rx, ∴ (x) (Px ⊃ rx) となる。これは仮言的三段論法の形をしており、それ故にこの竜樹の立場を否定するには大前提である「(x) Px」即ち、「すべてのものは依存してある→縁によつて生ずる」を偽として、先ず第一に否定しなければならぬのである。冒

而して、反対論者が竜樹への論難として具体的に用いた方法は、冒

頭において述べた如くである。即ち VN において反対論者は「すべてのものには本質の存在はない」とする竜樹の主張を、「本質の存在「すはない」という時点で否定しているのである。反対論者の「空」の批判の論理の出発点がここにあるのに対し、竜樹の論理の出発点はすべてのものは依存してある」ということにあるのである。VN において反対論者がこの竜樹の論理を成り立たせている大前提を論難している所は一ヵ所もみることができないのである。

註

- 1 The Vīgrahavyāvartanī of Nāgārjuna, E. H. Johnston and A. Kunst ed, Mélanges chinois et bouddhiques, vol 9°
- 2 Mūlamadhyamakakārikā, V. Poussin ed, Bibliotheca Buddhica, vol 4 (以下 MMK と略す)
- 3 全称記号「(x)」を用いて「すべての x について x が P (縁り生じるもの)」ならば「という仮言的命題に変格する」と MMK 1. 3, XV, 2, lxvxx. 18～19 からこのことが導かれる。
- 4 VN⁶⁷ 1⁶⁸ 2⁶⁹ 3⁷⁰ 5⁷¹ 6⁷² 9⁷³ 15 その註釈の部分。
- 5 VN⁷⁴ 7⁷⁵ 8⁷⁶ 11⁷⁷ 12⁷⁸ 14⁷⁹ 16⁸⁰ 20 偈⁸¹
- 6 VN⁸² 4⁸³ 10⁸⁴ 17⁸⁵ 18⁸⁶ 19 偈⁸⁷
- 7 VN. P108. 1 2～5
- 8 VN. P 121. 1 5～8
- 9 VN. P 121. 1 19～22
- 10 MMK. IVXX. 19 の前半句で「ㄱㄴㄱ」apratīyasamutpanno dharmāḥ kaścīna vidyate / (縁によらずに→依存しないで「生じたものは実にどんなものも認められぬ」)